

専門日本語教育研究の一方向(2)

専門日本語教育研究会会長

大坪 一夫

(麗澤大学外国語学部)

本誌創刊号で、私は、言語能力はかなり長期にわたって一定であること、しかしながら、言語運用能力の1つである理解力は、時々刻々変化していると述べた。また、その変化を起こす原因として世の中に関する知識が重要であるだろうとも述べた。私には、次のような経験がある。ある記事を読んでいたときに「装置が小型化すると、信頼性が増す」という記事があった。この条件と結果の関係がよく理解できなかったので、専門の方に質問すると、「装置が小型化すると、熱分布が一様に近づき、その結果、その装置が壊れにくくなるという意味である」と解説してくださった。理工系の記事であっても行間を読まなければならないのだということをそのとき悟った。業界の常識は、書かずに済ますということに過ぎないのだが、業界外の人間には常識がなく、常識のない人間には、行間が読めないことの適当な例になるなと思ったものだ。

しかし、「専門馬鹿」という言葉もある。素人ならば、簡単に解決できる問題が専門家にはなかなか解決できないということがときに起きる。司馬遼太郎が描く第2軍の旅順攻撃での参謀の考え方がその極端な例だろう。ある知識が理解を妨げたり、誤解の原因になったりする場合もありうる。一般的に読解能力が高いと考えられている中国人留学生に資本主義経済についての教科書を読ませたときに、共産主義経済の頭をもつ学生がいかに多くの誤解をしたかをその授業を担当した方に聞いたことがある。私自身も失敗した経験がある。ある共産圏の国で非常にいい日本語の辞書ができたのだが、すぐに売り切れてしまって、その時点では入手困難になっているという話を聞いて「再版しておおいに売ったらいいではないか」と私が言うと、「それは、資本主義社会の人が言うことであって、計画経済の社会ではそうはいかないのだ」と簡単に一蹴されてしまった。生半可な知識が理解力を低下させる面白い例だと思う。

世の中に関する知識と言語理解の関係は、なかなか複雑なもののようだ。ところで、日本人は、専門科目の外国語の知識をどのようにして身につけるのか考えてみることも知識と言語の理解について考える場合、参考になるかもしれない。大学に入るとたくさんの概論の授業を受けることになる。私が受けた哲学概論の授業では、先生は日本語の術語にドイツ語訳と英語訳を添えて板書なさった。私は、あの先生は学生がドイツ語を習っていないことを知らないのだろうかと不思議に思ったことを今でも思い出す。無駄なことをするものだと私はそのとき思った。しかし、先生の意図は、将来学生がドイツ語で哲学の本を

読むときに備えてドイツ語訳を添えられたのだろうと今になって思う。つまり、先生は、哲学についての知識と同時に専門用語の知識も与えようとなさったのだと思う。専門の事典にも、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語などの訳語がついていることが多いが、事典であると同時に外国語「辞典」の役割も果たさせようというのが編集者の意図なのだろう。

麗澤大学では、現在、2003年度完成を目指して、日本語教育センターを開設する準備をはじめている。その基本的コンセプトの1つは、専門科目の知識は、日本語教育センターの責任外であるとするというものである。大学院後期課程の外国人留学生をTAとして雇用し、学生の母語で知識を教え、学生が理解したあとで同じ教材を日本語の教材として使用し、教科書の言語面については、日本語教育センターの責任で教えようという試みである。つまり、餅は餅屋に任せるという考えである。結果については、数年後に本誌で報告させていただくことにしたいと考えている。

この試みは、初等教育での教科学習支援のための日本語教育にも応用できるのではないかと考えている。成人よりも子供のほうが教えるのが難しいことは明らかだろう。認知能力も未完成で変化しつつある児童に対する教育に、成人への手法を取り入れて成功するかどうかは未知である。しかし、われわれの研究成果が児童への支援に結びつくことが確認できれば、重要な成果だと考える。

世の中についての知識と言語の理解力についていろいろ考えてきたが、事態は、それほど簡単ではないようだ。私の知人に大変な読書家がいて、彼は自分が知らないことがあることを発見すると、それについて非常な関心を示し、そのことについて書かれた、たくさんの書物を購入してきて、貪欲に読み漁る。彼の場合、知らないことの発見が動機となって、強烈な関心が引き起こされ、読みはじめるらしい。彼がどの範囲に関心を示すのかは明瞭ではないが、彼の書斎を見る限り片端からという感じがする。

知識のなさが理解力に影響することは確かなようだが、知識がなくとも、関心があれば、 人は理解しようと努力することも確かである。しかし、もしまったく知識がなくて、全然 理解できなければ、関心の持ちようもない。いったいどの程度の知識があれば、人の関心 を引き起こすのか、それは、個人によって異なるのか、ある範囲で一般化できるのかについてもわれわれは知らなければならないだろう。

理解力、知識、関心が三つ巴になって学生の学習に相互に影響しあっているようだ。確かに関心のないことについて、われわれは、理解したいとは思わないし、したがって、読もう、聞こうという意欲は湧いてこない。もちろんこの3つだけが学生の学習に影響すると要因であると断言するつもりはない。ただ、われわれがしなければならないことが極めて多岐にわたり、複雑な様相を呈していることだけはわかるような気がする。